

短大国語教育の現状と課題

山本 裕一

A Study of Teaching Japanese in Junior College

Yuichi YAMAMOTO

【要 旨】

本学短期大学部における、初期教育の一環としての「国語」教育の実践とその工夫、その中で浮き彫りにされてきた課題について、「話す」「聞く」「書く」「読む」という4つの領域のそれぞれについて分析し、提示するものである。

1. はじめに

昨年度、国文学科の募集停止とともに地域総合科学科に配置転換となった。急な異動で準備に1月ほどしかなかったが、知恵を絞って、授業準備をした。しかし、実際に授業に入ると、大学生と短大生の違いに大きく戸惑うことになった。その経験を元に今年はさらに練り直し、短大生の国語力を向上させるべくさまざまな試みをしている。この稿は、短大赴任1、2年目の私の目から見た本学短大生（地域総合科学科を中心に）の現状を報告し、それに対応すべく奮闘している日々の活動を記録したものである。大学文学部から短大への配置転換を経験したものはそう多くはないと思われるので、長く短大に奉職されている先生方とはまた視点の違った考察ができるのではないかと自負している。

短大にやってきての一番の戸惑いは、その初期教育の意味づけの違いであった。国文学科で

は赴任以来20年近く1年生を担当し、その初期教育に携わった。近年は学生の学力低下に伴い、そのあり方を再考し、『大学生からのスタディ・スキルズ、知のステップ』など^(注1)を参考にして、学習技術の向上を図り、また、漢字能力検定、文章能力検定を利用して目標を設置し、地味で努力目標のわかりにくい「文章を書く」という行為に対し学生の意欲を喚起して、文章力向上を目指した教育を行ってきた。その他の講義・演習の多くは国文学・国語学の研究方法の実際を示し、実践の中から研究の方法を習得していくものであり、初期教育は学生をその土俵に上げるためのものであった。

ところが、短大では、国文学・国語学を研究するのではないため、初期教育としての「国語」の持つ意味がまるで違う。そこで、複数の先任の教員に相談し、短大の「国語」教育の目指すところを見定め、授業の目標構成を行った。また、本科では、「社会人としての基礎力」の上に、専門的な知識・技術の習得を積み重ねることを教育目標としている。この「社会人として

の基礎力」の養成は各科に共通すべき目標であると考え、「国語」の初期教育の目標に組み入れた。

「社会人としての基礎力」といえば、2006年より経済産業省が提唱している「社会人基礎力」^(注2)をすぐに思い出す。それは企業や若者を取り巻く環境変化によって重要度を増した「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」であり、具体的に言えば、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力（さらに12の能力要素に分かれる）である。また、文部科学省でも、「社会を構成し運営するとともに、自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力」として「人間力」^(注3)を提唱、ここでも、「自己制御の要素」（意欲、忍耐力など）、知的能力的要素（論理的思考力、創造力など）、「社会・対人関係力的要素」（コミュニケーション能力、リーダーシップなど）の3要素をバランスよく高めることが、人間力を高めることになると定義されている。両者は細かく言えばもちろん違うのだが、大雑把にまとめれば、「前に踏み出す」意欲、「論理的」に考え抜く力、「チームで働く」ためのコミュニケーション能力という、3つの要素が、社会人の基礎として必要であるとする認識は共通している。そこで、私はこれらの習得を目標とし、これらについて学ぶ機会を多く学生に与えるべきだと考えた。そして、初期教育としての「国語」「表現技術」の授業において、「考え抜く力」と「チームで働く力」のうちコミュニケーション能力にかかわる部分を養成すべく、以下のような目標を定めた。最近は、「前に踏み出す力」の養成が短大において最も大切だと痛感しているが、当時これを抜いたのは、「前に踏み出す力」は教育課程全体を通して行われるべきものであり、「国語」という教科の目標の中には組み込みにくい性格のものであったためである。

目 標

- 1 本学短大の全科のカリキュラムに実習が存在し、就職後も日誌を書く必要があること

から、「書く」能力の向上をめざす。現状を分析し、文章構成を考え、意見を述べる行程を踏まえて、「考え抜く力」（課題発見力、計画力、創造力）を育て、プレゼン能力の向上を図る。内容としては、小論文・作文・エントリーシート等を教材として使い、就職支援の一環ともしたい。

- 2 昨今その不足の叫ばれるコミュニケーション能力、特に「話す」能力の向上を図る。細かく言えば、「チームで働く力」の構成要素のうち、「発信力」、「傾聴力」、「柔軟性」（意見や立場の違いを理解する力）、「状況把握力」（自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力）を育てる。地域総合科学科の学生は近い将来、同僚や顧客と、また、初等教育、保育の2科の学生は幼児・児童・生徒やその保護者、地域の人々や同僚との間にコミュニケーションをとる必要があり、それぞれに適した配慮が必要である。（「社会人基礎力」の中のこれらの要素は、各科に共通して養成すべき項目であると考えられる。）

「話す」「書く」と表現力養成に特化した「国語」教育を試みたわけだが、1については、これまでの蓄積があった。2についても、幸い、同僚の小沼俊夫教授の教えを乞うことができたので、自らも指導方法を学びながら指導することができた。なお、小学校～高等学校の学習指導要領において、「国語」の「内容」にあげられている「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」のうち、「読むこと」については、週1コマ15時間の授業計画に含めて構築することが難しく、目標から省いた。幸いなことに今年より「文学」の講義を持つことを許され、その方面についても情報を得ることができたので、後述する。また、「聞くこと」については、「話す」中で自然と身につくものと考えていたが、甘かった。これについても次項において詳述する。

以下、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」について分野ごとに分け、1年前

期に開講されている「表現技術」「国語」等の授業での実践について報告し、そこに見られる学生の現状の分析を行い、初期教育における「国語」の課題について考えていく。(論者は昨年は本科の「表現技術」、初等教育科・保育科の「国語」の授業を担当、本年度は本科の「表現技術」と初等教育科の「文学」を担当している)

2. 「話す・聞く」分野の教育

体育祭での学生との会話である。

「先生、なんか気持ち悪い」

「エー、そんなこと言われたら悲しいなあ
(ちょっと考えて)

「えー、だって、気持ち悪いだもん」

この時は本当にショックだったが、後で考えてみると、このような会話が成立するところに、短大生の国語教育の問題点が如実に現れているように思われる。つまり、語彙の不足と相手に対する配慮の欠如である。

その日私は散髪直後、むしろいつもよりこざっぱりしていたと思われる。本当に気持ち悪かったとすれば(いつもそう思われているのでなければ)、いつものスーツと違うラフな格好、教室ではなく校庭にいて、右利きなのに男性ハンドで左でボールを投げていることに対する違和感、つまり、通常なら「おかしい、変、違う」あるいは「怖い」とでも表現されるべきところで、言葉が思いつかなかったのではないかと思われるのだ。私より数段ハンサムな若い先生も「キモイ」と言われたと笑っていたので、これはあながち外れているとは思えない。

また、私の心情を伝え、再考を促したにもかかわらず、他の言葉で置き換えることをしなかったのは、その言葉が相手にどのような感情を与えることになるか、ということに対する配慮が欠けているためとも思われる。これらは企業への就職活動やその後の仕事に大きな悪影響を及ぼすものであり、見逃すわけには行かない。

「話す」ことの基本的な指導は、前述の初期

教育用参考書にも記事が乏しく(プレゼンについてはくわしく書かれている)、経験の豊富な小沼俊夫教授によるパブリックスピーキング、Grow モデルの指導等をもとに行った^(註4)。

1例をあげると、わざと不十分な説明で顔の絵を描かせ、「きちんと組み立てて話さないと、相手には伝わらないこと」を教え、話し方のポイントを押さえた上で「相手に伝わるように」電話の受け答え(道筋案内、連絡)や紹介文、ポスターを自ら考えさせ、発表させる、というものである。これは、相手に対する発信力を高めるものであり、学生も「難しい」と文句をこぼしながらも、その必要性はわかっているようで、みな熱心に取り組んでいた。特に初等教育科ではポスターを作る課題で優れたものがいくつも見られた、これは科の特性によるものであろうか。

必要な情報を集め、文章構成を考え、プレゼンを創造するという行程は、後に続く、「書く」ことの行程とも共通するが、こちらの方が幾分容易である。教員がわずかに「そんなにたくさんは覚えられないよ」(重要度による文章の削減)、「わかりやすい目印はどれ」(キーワードの抽出)、「どの順番に並べたらいい?」(文章構成の推敲)などと指示することによって、学生は何度も自分の文章を見直し、自力で文章を完成させる。完成した文章より、その過程によって培われる「考え抜く力」の3要素(課題発見力、計画力、創造力)が重要なものであり、これは短大における「話す」領域の教育における有効な手段だと確信している。

これによって強化された「発信力」を受けて、ひきつづき、「傾聴力」、「柔軟性」、「状況把握力」の強化を目指し、ディベートの講義を行った。ディベートは平成14年版の中学校国語科全教科書に採用されており、実際に授業に組み込まれているところも増えているようで、中学や高校で既に実施したことがあるという学生も1-2割程度存在した。講義は以下の構成で行った。

1 ディベートとは何か、ジャッジの方法な

どについての説明をする。

- 2 2～4人のグループに分かれ、肯定側、否定側、ジャッジの3つの役割を分担し、用意されたシナリオを読み上げることで、ディベートの実際を学ぶ。
- 3 グループで「校則はやめるべきだ」などのやさしい議題を設置し、実際にやってみる。
- 4 皆の前に出て、グループ対グループでディベートを行う。
ジャッジは双方の講評と判定を行う。

これは『ディベート入門講座～シナリオ形式のディベート～』^(注5)の方法を踏襲し、内容を簡素化したものである。特にフローチャートを使った、議論の展開を視覚化する方法(略記すると、最初の立論を縦に並べ、それに関する意見が出れば、その横に→で記録し、反論や更なる意見はさらにその横に矢印を書いて記し、横へ横へと並べていく形式である)は論理的な意見の構築と展開に役立つと思い、国文学科の時から採用しているものである。

しかし、実際にやってみると、国文学科の時には見られなかった、以下の問題点が見られた。

- 1 相手の言うことを書ききれないで、主張を理解できない学生が多かった。
- 2 自分の意見を主張するだけで、論理が噛み合わない(ワークシートが横に展開しない)が多かった。
- 3 ジャッジの講評ができない(まとめられない)で立ち往生する学生が少なくなかった。

1の問題については、ほかにも思い当たることがあった。後期になり、最初の授業が合同授業になった。他の教員が話をしている間、自分がフリーになったので、ずっと学生のほうを見てみたが、なんとノートが出ていてメモを取っているものが、1-2割しかいなかったのである。あわてて、ノートをとるよう数週間にわ

たって指示したが、ノートは出ているものの、メモをとる学生数はわずかしかなかった。

これらの現象から考えるに、学生は、普段から、メモをしながら聞くという習慣づけがなされていないのではないか。これでは頭の中で理解できる範囲でしか話ができず、簡単な話ならともかく、論理的な話を展開する機会が少なくなる。

そこで2の現象がおきてくる。ディベートの反論部分では、多くは、相手のここがおかしい、自分が正しいという主張ばかりにとどまり、相手の意見を踏まえて切り返すことは数回に1回しかない。反論が繰り返されることはなおさら少なかったし、次第に話が逸れて行った。これではコミュニケーションが成り立たない。

これらの問題は傾聴力、柔軟性、比較分析能力の不足によるものであり、それらのうち、最も基礎となる傾聴力の養成が、まずは急務であると感じた。そこで、今年度は、「表現技術」の授業の中で傾聴力を高めるいくつかの工夫を試してみた。

まず、授業の形態を一般的な講義形式からワークシート中心に変えた、そのことにより、必然的に講義中に学習内容を「書く」中で「考える」習慣がつくと同時に、ノートテイキングに慣れない学生にその実施と習得を容易にさせることができた。

また、学年当初、最初の授業で導入教育として、「聞く」練習を行った。講義や説明の文章を読み上げ、それをメモにとり、ノートへと再構築する練習である。読み上げる内容をすべて書こうとして、すぐに諦める学生に対し、キーワードを記録し、記号を活用することと、予習による予備知識の取得、復習や反復的に見ることによる理解の向上について述べ、その実践とメモを取る習慣づけのため、A6版30枚のメモ帳を配り、「評価の一部にするので、講演を聴くときのメモや進路指導等の連絡の備忘録など日常生活含め、何でもいいからメモを取るように」と指示した。

しかし、定期試験時に提出されたものを見る

と、ノートの多くは私の担当する授業の板書が中心で、わずか数枚で終わっている。講義終了までに1冊をやり終えたのはわずか45名中3名であり、半数を超えたものを含めても、10名に満たない。成功したとは言いがたい。ただ、授業中にほぼ全員がノートを出しており、ペンを持つようになった。板書だけでなく、講義中の余談や口頭でしか話していない内容がメモに書かれることが増えた。引き続き傾聴力の向上を図る試みとして続けていきたい。

最後に3の問題について述べる。終了後のジャッジには、双方をねぎらい、双方のどこがよかったのかを指摘した上で、どのような理由でどちらの勝ちにしたのかを述べることを要求したが、比較になっていない指摘、「声が大きかった」など本質とは関係のない指摘が多かった。比較してプレゼンすることが苦手なのは、後期に行われた「国語表現法演習」の課題「2つの会社を選んでその情報をプレゼンし、自分だったらどちらを選ぶかを理由とともに示さない」の発表の際にも見られ、彼女らが「比べて見てプレゼンする」ことに慣れていないことを痛感した。これらの課題をこなすことは柔軟性や状況把握力を鍛えることになると思われるので、今後も比較分析および、その結果をプレゼンする機会を多く与えるよう、考えていきたい。

3. 「書く」分野の教育

これについては国文学科時代の経験の蓄積があったので、短大生向けにアレンジして以下の5段階に分けて実施した。

A 言葉に意識的（敏感）になる（語彙を増やしていく）

以下のような質問を繰り返し、説明の中で、語彙が少なければ満足な話ができない（下記の例①②参照）、新聞を見たり、読書をしなかったら語彙は増えないということ、普段何気なく使っている言葉も、選ぶ言葉一つで、イメー

ジが大きく変わってくる（例②③参照）こと、相手のことを考えて言葉を選ばないといけないこと（例④参照）などに自ら気づかせ、普段使う言葉に意識的になるよう試みた。これらについては作業が平易な点と「はじめの方に書いたものがあなたが1番異性に望むものですよ」（例②での発言）、「小学1年で習う漢字はこれだけです、習っていない漢字を使っちゃだめですよ」（例④での発言）などの発言によって発見があるのが面白かったらしく食いつきがよかった。ただし、語彙を増やしてほしい、言葉のリズムを体得してほしいという目的のもとに設定した「新聞のコラム欄を1週間見て、これまでに知らなかった単語を1つ辞書を引いて覚えてきなさい」という課題は、大半の学生が忘れてくるなど、語彙を増やすことに意欲的になるまでにはいたらなかった。

- 例 ① 「おいしい」を日本語・英語・中国語・スワヒリ語で言ってみよう？
- ② 理想の異性をどんな言葉でほめますか、思いつくだけあげてみましょう？
- ③ 無人島へたった1つだけ何かを持っていけるとしたら、何を持っていきますか？
- ④ 「学校と家庭の教育の矛盾」を小学2年生・幼児にわかる言葉に変えてみよう。

B 短作文を推敲し、言葉のあやまりをチェックする（推敲することを覚える）

とにかく、学生の提出物には誤字・脱字・誤用が多い。そこで、「危機一発」や「尊大なる先生」「僕の夢は宇宙を飛びます」「A君はB子よりも色の白いC子が好きだ」など、誤用を含む文、あいまいな文を読ませ、訂正させた。クイズ形式にしたこともあって、学生のりもよかったが、試験では相当数の誤字があり、また、誤字訂正の問題に不正解者が多かった。クイズにしたことが、逆にただその場の楽

しめで終わっていて、推敲の重要性が理解されなかったのかと反省している。

C 実際に短作文を書き、文と文とのつながりに注意する（相互にチェックする）

まず、初めに連作文を行い、指示語と接続詞の大切さを体感してもらう。これは、国文学科の時から10年以上続けてきたものであり、ゲーム性が高いため、学生にもう1時間続けてほしいといわれたこともある方法である。簡単に説明すると、4～5人でグループを作る。原稿用紙をそれぞれ1枚ずつ持ち、それぞれ、最初の2行を書き、次の学生に渡す。続いて、こちらで選んだ任意の接続詞を頭において、その学生が続きの2行を書き、さらに次の学生に渡す、これを繰り返して、原稿用紙1～2枚の物語や文章を完成させる。接続詞を指示語に代えてもう一度行う。

時間はかかるが「接続詞の使い方がおかしい」と文章の論理性が崩れてしまう」「指示内容がない、または遠い場合は理解が難しい」ということを体感できて効果は高い。おかしい文に違和感を感じることは国語の能力いかんを問わずできるので、おかしいと思わせることで、そうした誤った文を作らないように注意する感覚を養うのである。

同様に5W1Hの欠如した文を作らないよう、これまた、わざと5W1Hを抜いた文を提示し、言葉を埋めさせる練習を行った。これに続けて、「意味のない『が』は使わない」「連用中止法を多用しない」「40字以上の文は書かない」など、比較的簡単なコツを実行して明快な短文を作る練習を行った。

みな真面目に授業を受けてくれたので、期末テストでは高得点を期待したが、「以下の接続詞を必ず文中に入れて作文しなさい」という課題において、接続詞の使い方を誤っているものが1/4から1/3ほどおり、特に「しかし」で逆接にならない前後の2文を接続するものが目立った。

そこで、今年度は、「なぜなら」「たとえば」

「しかし」を間に挟む例文作りを短文で徹底して行った。今のところ提出物で目立つほどの誤用は見られていないところを見ると、このようなトレーニングの反復が効果的であると思われる。

D 短い文章を読み、キーワードやキーセンテンスを軸に作品を理解する

この前の段階まではゲーム性も強く、負担も軽いので、学生の食いつきもよかったが、この段階になって、急に騒がしくなり、また、授業を聞かなくなる学生が増えた。高校までの「国語」と同じような講義形式・内容となり、「読む」ことに対する抵抗が出てきたようである。

難度が上がるにつれ、抵抗は次第に強くなって、「長い文章でもアウトラインを理解すれば、容易に理解できる」という実感を持たせることはできなかった。次の段階へ行くためにここを踏まえてほしかったが、不十分なものに終わってしまった。

E アウトライン（キーセンテンス）をメモ書きし、構成を考えて、各種の文章を書く

前段階の裏返しで、アウトラインをまず書くという習慣づけをし、アウトラインを書き、それを少しずつ例示や理由付け、説明で膨らませていく形式で、徐々に文章を長くしていく試みをしたが、前の段階の理解が不十分であったため、実際の課題の際、アウトラインをまず書いて始める学生は少なかった。また、各種文章の書き方指導の際、メモがうまく取れない（必要な情報が欠落する）、形式の重視される手紙などの文章において、その形式の理解が不十分のため、違和感のある文章になってしまう、という2点が非常に気になった。

今年度、前者については入学直後のオリエンテーションとして、前記のように授業中に強化した。後者はインターンシップなど、他の講義における指導の機会があるのでそれに譲った。

結局、当初の目的である、日誌等を「書く」能力の向上、論理的に考え・プレゼンする習慣づけには失敗したわけだが、その過程を通じて気づいたことがある。特に初等教育科の学生に顕著であったが、自分の興味が無いことには見向きもしないが、自分の興味のあることには別のクラスかと思われるぐらい熱心に取り組む、ということである。これは教材や方法を工夫することで、学生の主体的な活動を喚起できる可能性があるということである。

そこで、今年度は、就職試験の面接や自己分析で使われる質問を主に教材として使った。これらは興味を引く内容なので、学生が主体的に取り組んでくれることが期待されるからである。また一方では、このような質問について質問者の意図を考えていくことが、先述した体育祭の際の挿話に見られる「会話の相手に対する配慮の欠如」を解消する近道だと感じたからでもある。

例 「あなたを色でたとえると何ですか？」
「今までで一番楽しかった事は何ですか？」
「あなたは料理が好きですか？」

これらは実際に面接や作文で出題された質問だが、このような質問を繰り返し、その意図や答え方による受け取り方の違いを説明することで、「相手はなぜそんな質問をするのか」と考えることへの習慣づけと、「こんなことを言えば、こう考えられるかもしれない」、と考える柔軟性、状況把握力を育て、発信力を高めることを目的としている。学生は一部を除いて主体的に取り組んでくれた。その結果、エントリーシートを教材とした文章指導において、例年よりも早期に、内容的に優れたものが出始めている。もっとも、職業観を聞く「あなたは職場に何を求めますか」という質問に、「給料、休日、福利厚生」と答えるなど、応用がきかない子も消えてはおらず、まだまだである。

今後も『面接 心にふれる自己表現』^(註6)などの書籍やビデオ教材を通して、企業、面接官の側から見た面接の意味や面接の言葉の意味を

考えていきたい。それらを教材として、柔軟性と状況把握力を育てるとともに、企業の求めるものを知り、確信を持って面接に臨む自己表現力を磨いていきたいと考えている。

4. 「読む」分野の教育

今年、初等教育科で「文学」の授業を持つ幸運に恵まれた。このことで「表現技術」や「国語」ではすることのできなかった「読む」分野の教育が可能となった。ただ、自分の専門である昭和初期から戦後にかけての小説を題材にしたのでは、学生は興味を持ってくれないと考え、「ごんぎつね」などの教科書にでている作品や昔話、物語を題材に選んだ。児童教育に携わろうと決意している学生たちだけあって、皆反応がいい。昨年とは学生が違うので一概に比較はできないが、題材のためか、昨年より静かで、熱心に聴いてくれる学生が増えた。授業中の発言も多い。考えを押し付けるなど反発する学生もいたが、それはそれで真剣なのである。

ただ、大半の学生は「読む」ことに慣れていない。アンケートをとったところ、1ヶ月に読む本の冊数0という学生も多く、おおむね少ない。また、漫画や雑誌は読むことがあるが、小説などは読まないという傾向が見られる。これでは正しい日本語、美しい日本語に触れる機会が少ない。一方でテレビを見る時間は毎日数時間と長い。テレビではアイドルが料理を食べてはヤバイといい、ジェットコースターに乗ってはヤバイと絶叫する時代である。語彙は限られ、言葉を使い分ける能力は衰えていく。そこで次のような3段階で授業を構成してみた。

A 言葉に意識的になる

まず、最初は詩、俳句、短歌の短詩形文学を用い、他の分野同様、言葉に意識的になること、すなわち言葉一つに込められた気持ちを読み取ることから始めた。言葉に意識的になるには自分で作ってみるのが一番である。従来は「一筆啓上 日本一短い母への手紙」を紹介し、

自作させるのだが、今回は、直前にTV放映のあった「三行ラブレター」を自分たちでも作ってみようと呼びかけ、作成後、一覧を作って投票を行った。自分たちの作品だから発表の際など興味津々に異様なまでに静かだった。身近で興味のある教材なら真剣に読んでくれるということが確信できた。余談だが、支持者が90名中20名と圧倒的に多かった1位の作品を含め、10位までに4つも携帯メールに関するものが入っており、短大生における携帯メールの占める割合の大きさを思い知った。今後はメールの打ち方や、「恋空」などのライトノベル・携帯小説を教材に取り込んでいくことも考えてみたい。

B 文章の読み取りを試みる

→ 面白いと思って本を手取るように育てる

次に文章の読み取りを試みる。たとえば随筆(向田邦子「父の詫び状」)で留守番電話がはじめて入ったところのエピソードを読み、文学作品にあらわれた「時代」や自分とは違う人の考え方を読み取ってもらう。また、たとえば「夕鶴」をもとの話である「鶴女房」や世間に流布している「鶴の恩返し」と比べて読むことで、それぞれが伝えたかったもの、作中人物の気持ちを読み取ってもらう。このようなことを繰り返すことで思考の柔軟性を育てることができると考えている。

面白さを知ってもらえば、自分から文学作品を読んでくれるだろう。そもそも週1時間の授業で飛躍的に能力の向上を目指すのは難しい。優れた文学作品に触れ、それが読書の習慣づけにつながっていけば、能力は自然と向上する。その端緒を作り、その方向に進めるよう、背中をそっと押すことが、この授業の役目だと考えている。

なお、この考えの延長上で、最近一つの試みとして、「ばらばら読み」の推奨をしている。本屋に行ってタイトルをざっと見渡し、手にとって目次を「ばらばら」と見、興味のあるところやよくわからないところがあればそこを讀

む。気に入ったら買って帰って暇なときに「ばらばら」見ればいい、という、かなりいい加減な読書の薦めである。月に一冊を読まない学生にいきなり過大な要求をするのは無理であり、まずは本に親しんでもらおうと始めた。授業の始めに、「男は3語であやつれる」「子どもは話し方で9割変わる」「話を聞かない男、地図を読めない女」など^(註7)、学生の興味を引きそうな本を紹介し、目次を読み、その中の一部を音読するだけなのだが、思ったよりも反響は大きく、最近では「先生、その本貸してください」と毎回それも複数人から言われるようになった。これで本に親しみ、本から必要な情報を得るという習慣づけができれば、幸いである。

C 文学を通じて日本人や自分について考える

最終段階として、日本文化や日本人について考えてもらう場を提供する。これは多角的に物事を見ることであり、自分自身を省察することにもなり、柔軟性や状況把握力の養成に役立つものと考えている。たとえば、学生に次の3つの質問をする。

- ① 地獄のイメージについて書いてください。
- ② 地獄の対極にあるものは何ですか。どのようなイメージですか。
- ③ 神様の名前を書いてください。

これらの質問に回答することによって、地獄といえど仏教的なものを想起するが、その対極として考えるのはキリスト教の天国であり、神々といわれて思い出すのは、ギリシャ・ローマ神話が多い、と日本文化の雑種性に自分で気づくことができる。また、各地獄の性質を解説していくと、そんなことで地獄におちると昔の人は考えていたんだと驚き、自らの価値観を振り返ることができる。

ただ、読書に抵抗のある学生たちであるので、教材を読ませることを極力減らし、授業は、学生たちが興味を持ち、自ら手に取るよう

になることを期待して、多くは教員が紹介をする形態で授業を構築している。もう少し読んで欲しいと思う気持ちもあるが、抵抗が無く、主体的に読める範囲にとどめている。

なお、特にこの段階での話は板書が多くなるが、「先生、それ写さないといけない？」という質問が飛び出してくる。質問に答えてもらう紙に板書をする学生も少なくない。板書を写すことで満足している感があるので、より主体的な参加ができるよう、ワークシートの導入、自由討議の時間の設定など、今後工夫していきたい。

5. おわりに

以上、昨年度の「表現技術」「国語」、今年度の「文学」（いずれも1年次前期実施）の授業実践を中心に、短大における「国語」の初期教育の実践報告と、そこから見出される課題、克服のための工夫について述べてきた。学生の未来のため、これからも努力奮闘していきたいと考えているが、実感として、入学直後の初期教育の一環として「国語」教育の重要度は高いと思われる。本稿は大学で初期教育を長く行ってきた者の苦闘の記録である。視点の違う考察として、余人の参考に寄すことができれば幸いである。

参考文献

- (注1) 『大学生からのスタディ・スキルズ 知のステップ』学習技術研究会、くろしお出版、2002年4月
『知のツールボックス』専修大学出版企画委員会編、専修大学出版局、2006年4月 他
なお本年度は『NHK ラジオテクニスト NHK アナウンサーとともに ことば力アップ』（日本放送出版協会、2010年4月）を参考にさせていただいた。
- (注2) 経済産業省 経済産業政策局 産業人材政策室 HP による
- (注3) 内閣府「人間力戦略研究会報告書」平成15年4月

- (注4) 「話し言葉教育の現状と課題（1）」別府大学短期大学部紀要26（2007. 3）, p.7-14. なお、28（2009. 2）, p.9-18、29（2010. 2）, p.15-31にも（2）（3）として続編を掲載されている。
- (注5) 大熊徹監修、池田修講師、Japan IAIM
- (注6) 小沼俊男、NHK CTI 日本語センター、2000年12月
- (注7) 「男は3語であやつれる」伊藤明、PHP 文庫、2009年2月
「子どもは『話し方』で9割変わる」福田健、アステ新書、2009年3月
「話を聞かない男、地図を読めない女」アラン・ピーズ+バーバラ・ピーズ／藤井留美訳、2000年4月 他